

ロスリンチャペル

岡本 浩一

okamotok@chs.nihon-u.ac.jp

1997年の夏、浅見哲夫氏とスコットランドの城の訪問を計画して Michelin Tourist Guide “Scotland”を調べていたところ、突然目にとまったのが「Apprentice Pillar Rosslyn Chapel」の図であった。ロスリンチャペルにある見事な彫刻に飾られた柱である。「Apprentice」(徒弟)というのは、フリーメイソンの初めの三階級 Apprentice (徒弟)、Fellow (職人)、Master (親方)の最初の呼び名なのである。私はかねてから1307年に時のフランス王フィリップ四世(Philippe le Bel)により一斉に弾圧されたテンプル騎士団について関心を持ち調べていたがこのテンプル騎士団はフランスでは弾圧されたが、イギリス特にスコットランドにおいて何世代にもわたり密かにその活動は続けられ、確証こそまだされていないが、その後のフリーメイソンへの発展へと繋がっていったといわれている。

私が長い間勤めた国際機関(OECDとIAEA)にはメイソン会員が多いといわれる。そんな事からかも知れないが、テンプル騎士団の創設からその後の経過、さらにメイソンへの発展は私の大いなる関心事のひとつであった。IAEA時代の恩師 Henry Seligman のアドバイスをはじめ、いつも自分では新たに見つけたと思われることを話す相手に恵まれたことは幸せであった。もっとも私がとくとくと話すこと等、Seligman氏等はすでに御存知のことばかりだったのかもしれないが・・・。

ここでテンプル騎士団のことについて簡単にふれておきたい。テンプル騎士団は第一回十字軍で聖地エルサレムを奪還した(1119年)後、ユーグ・ド・バイヤン他9名のフランスの騎士により創設された。彼らはエルサレム王ポードワン二世により、かつてソロモン神殿が建っていた場所を与えられたのでテンプル騎士団といわれた。

聖地に常備軍が駐屯していなかったこともあり、聖地防衛を買って出た騎士団は瞬く間に勢力をのばしていく。特に聖地巡礼の守護を目的として1128年のトロワ公会議で、キリスト教会の正式の庇護を受けたことはその勢力を増大させ、フランス全土及びヨーロッパのいたるところから、土地や金銭の寄進を受け12世紀後半には、既になみなみならぬ財力を持つにいたった。洗練された国際的銀行システムをつかさどり、ちょうど現在の旅行業者のような成功も収めている。騎士団の発展は中世の騎士にまつわる多くの

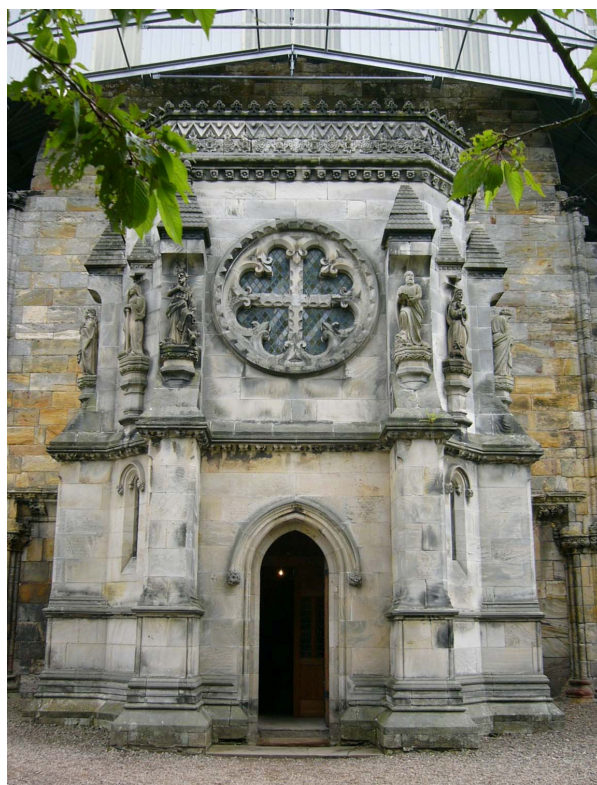
伝説や小説、音楽として後世に伝えられるところである。しかしその隆盛は1187年エジプトの支配者サラディンによるエルサレム奪回の成功により、騎士団が撤退を余儀なくされた頃からかげりを見せ始める。

そもそも騎士団の成立から彼ら団員に課せられた戒律は、騎士団に対する忠誠であり、けてして特定の国家や国王に対してではなかった。団員同士のみ分かり合える秘密めいた修道会、それも裕福で強大な勢力を誇る騎士団の存在は、聖地から追い出された今となつては、時の権力者にとっては苦々しいものとなつていった。財政難にあえいでいたフランス王フィリップ四世は、教皇クレメンス五世の暗黙の了解のもと1307年に騎士団団員5000名の一斉逮捕を行う。度重なる耐え難い拷問が行われ、1314年に騎士団長ド・シャルネーとノルマンディ管区長ド・モレーの火刑により一応テンプル騎士団はその歴史に幕を下ろすのである。ただこの話は後まですっと尾をひいてくる。例えば前述したこの後登場するフリーメイソンとの関係など多くのつながりが生じてくるがここでは省略する。

ここで主題のロスリンチャペルであるが、このテンプル騎士団のその後に密接に関連してくる。名前からするとキリスト教の聖堂を思わせるが、印象は完全に異なった異端の聖堂チャペルといえよう。この場所はEdinburghの南約12キロの所にある。

スコットランドにおいて1700年代まで代々マスターメイソンを務めていたシンクレア家は、かつてテンプル騎士団初代の設立者の一人ユーク・ド・バイアンと婚姻関係を結んでいる。そして1446年このチャペルを造ったのが一族のウィリアム・シンクレアである。彼はスコットランド・グランド・ロッジ初代のマスターフリーメイソンとなっている。

ロスリンチャペルはバラ十字団のシンボルであるバラと十字架の装飾がふんだんに施され、見るものを圧倒する。またフリーメイソンにつながる彫刻や特筆すべきは、聖堂創設がコロンブスのアメリカ大陸発見（1492年）以前にもかかわらず、新大陸から持ち込まれたアロエやサボテン、とうもろこし等の植物の彫刻が見られる事である。このことから考えられるのは、フランスを追われたテンプル騎士団の一派が、



ロスリンチャペル正面

コロンブスよりかなり前にアメリカに渡り何らかの交流をもったのではないかと
ことである。そして騎士団を送り込んだのが、このシンクレア家である記録も残されてい
る。

前述したユニークな「Apprentice Pillar」であるが、その建設に当たっての逸話は胸を打
つものがある。

創設者ウィリアム・シクレアの命で Pillar をつくることになったマスターメイソンは、
そのモデルを求めてローマへ勉強に行くのであるが、その留守中、許可を得た弟子の一
人が夢に現れたデザインの Pillar を見事に作り上げる。やがて帰国したマスターメイソン
は、いかばかり驚いたか！ そのあまりに見事な出来は彼をしだいに怒りと嫉妬に狂わ
せ、ついに彼は弟子を殴り殺してしまう。その結果、マスターメイソン自身も絞首刑に
処せられる。聖堂のこの血塗られた歴史を、私たちは今この二人の作った二本の対照的
な柱（Apprentice Pillar 徒弟の柱と Master Mason's Pillar 親方の柱）から知らされる。

ロスリンチャペルを'97年夏訪問した時の強い印象を、知人の清川理一郎氏に話をした
が、それらは彼の綿密な調査のもと、氏の著書「キリストと黒いマリアの謎」（彩流社）
に紹介されている。私の撮った写真その他を著書のなかに取り上げ紹介して下さったの
は嬉しかった。ここで大変驚いたことはこのロスリンチャペルを、明治4年の岩倉具視
卿一行による米欧視察団が訪れていることである。その様子は久米邦武編「欧米回覧実記
（二）」（岩波文庫）に、この柱の絵と共に詳しく述べられている。後の明治政府の要人
となるそうそうたるメンバーや福沢諭吉、津田梅子等々が今から約百三十余年あまり前



チャペル内にある「徒弟の柱」



「親方の柱」

の、今でさえ何も無い田舎町であるロスリンになぜ訪れたのか、誰が訪れることを薦めたのかは大いに興味をそそられるところである。明治維新とフリーメイソンの関係等にまつわる謎解きはこれもまた非常に面白い。

余談ではあるが、維新の陰の功労者としてのトーマス・グラバーに関心を持ち始めたこともあり、今夏のスコットランド旅行中にアバディーンにあるグラバーの住まいを訪れてみた。やっとの思いでたどり着いた彼の家は三菱重工業（グラバーはその創設にも関わっている）の手で一度は手入れされたと思われるが、今はその表札すら読み取れないほどらぶれた感じで胸が痛んだ。

もう一度ロスリンをゆっくり見たい、またスコットランドに数多く点在するお城を訪れてみたいと思い、この夏京大の古林氏御夫妻と再訪する予定でいた頃、衝撃的な本にめぐりあった。世界的ベストセラーとなったダン・ブラウンの「The Davinci Code」である。

夢中になって paper back を読み終わった頃、日本語訳も出版され、こちらを買ってまた読みふける始末。日本でも 70 万部を超えるベストセラーとなっている。この本には私が相当昔から本で調べたり疑問に思ったりしていたことが、もちろんフィクションを含めた推理小説として見事に書かれ説明されているのである。今では彼の本は片端から読み、新たな若い才能の出現に拍手を送っている。「The Davinci Code」は、いわゆる聖杯伝説に基づいた著作であるが、実はこの本の大団円にロスリンチャペルが登場するのである。

しかしそのせいであろうか？ 今回訪れたロスリンチャペルは世界中の観光客で溢れ、前回のような趣が薄れた気がして残念であった。売店にはしっかりとダン・ブラウンの本が置いてあったのはもちろんである。

ちょうど私たちがスコットランドを訪れていた頃、ポーランドの演劇青年だったカロール・ボイテワ司教が、今では偉大な（空飛ぶ教皇）ヨハネス・パウロ二世として南仏 Lourde に出かけたニュースが流れた。テンプル騎士団の影響がもっとも強かったのが南フランスであり、またローマ教会により異端とされ、第 4 回十字軍の頃、通称アルビジョワ十字軍（1204～1247）により弾圧を受けたカタリ派の拠点もこの南フランスなのである。同じキリスト教徒同士の戦いとして 1203 年の十字軍によるコンスタンチノーブル攻撃と共に、ローマ教会の汚点として歴史に残る場所である。

この様に Lourde のある南仏は、かつては教会にとって異端の地であった。何気なく聞き流すニュースもこの様な歴史的背景を考えると興味深いものがある。ヨハネス・パウロ二世は他宗教や他文化との交流に非常に積極的な法王である。1992 年に 17 世紀に教会から破門されたガリレオ・ガリレイを 350 年ぶりに破門をといたことは記憶に新しい。現代、世界は宗教の名のもとに対立し（実際は貧困や大国の経済的な理由が背景にあるとしても）毎日おびただしい血が流されている。長い歴史を持つキリスト教会がテンプル騎士団や魔女裁判など、中世での異端への宗教裁判による迫害という過去への反省からも、他宗教に対して調和と寛容の精神を持って世界の平和へ向けての一層の努力を

はらうことを期待したい。

最後に色々な引用に関しいつもお世話になる核データセンターの中川庸雄氏に心から感謝申し上げます。また「The Davinci Code」の paper back をいち早く紹介して下さった日大の同僚で高エネルギー研塩谷亘弘氏に感謝いたします。

ダン・ブラウンの次の翻訳本「天使と悪魔」の舞台は CERN（欧州原子力機構）となっているのも面白いことです。

2004.09.13